黒と白のエクスタシー――それがメイド服だ。

クラシカルでシンプルな、黒いドレスと白いエプロンのビクトリアン・タイプこそ至高。

最低限に抑えられた肌の露出と、動きに合わせ控えめに靡(なび)くロングスカート……まさに清楚の極み。

無論、ノースリーブとミニスカートのフレンチ・タイプを否定はしない。あれはあれで可愛らしく素晴らしいと認めよう。

ただ、あくまで個人的に、ビクトリアン・タイプが好きなだけなのだ。

そう。それはもう、狂おしいほどに……。

15 戦目

メイド服はお好き？

俺の名前は 橘(たちばな) アサト。

地元のゾイエス学園に通っている、高校三年生の極めて平凡な男子だ。

毎年この時期――新年度になると、妙な既視感(デジャブ)を覚える。まるで高校三年生を何度も繰り返しているような気になるというか……。

もちろん留年などしていない。

そうではなく、国民的アニメよろしく、同じ一年が繰り返されているんじゃないかという気がしてしまう。

まあ、ありえないが。

そんな事より――

「なんで今日はメイド服なんだ？」

と、俺はストレートに訊(たず)ねた。

相手はツバキだ。

フルネームは高千穂(たかちほ)ツバキ。

ゾイエス学園初等部に通う五年生で、見た目は普通の小学生なのだが、その大人びた精神(メンタル)は規格外――いっそ異常とさえ呼べる。規格外な部分は肉体(フィジカル)にもあるのだが、今回は触れないでおく。事案とか色々あるが、今は優先すべき話題が他にある。

「実はこれから番組の収録があって、これはその衣装なんです」

普段と違う衣装――メイド服に身を包んだツバキは、少し恥ずかしそうに答えた。普段は澄ました表情が多いので、その様子は衣装と相俟(あいま)って余計に新鮮に感じられる。

小学生を相手に何を言っているのかと正気を疑われるかもしれないが、見た目の幼さと、口調や表情からも伝わる落ち着いた雰囲気との差異(ギャップ)は、はっきり言ってヤバい。ツバキと話していると年下という気がせず、しかし見た目は普通の小学生――しかも可愛い――のため、矢鱈(やたら)と背徳的な気分になるのだ。

……今更だが順を追って話そう。

此処(ここ)は『きょくちせん屋』。

〈管理人〉と呼ばれる人物が趣味でやっている店で、一応、分類上は喫茶店である。どういう訳か俺はこの店の店長――あくまで名目上だが――に任命されてしまい、形だけとはいえ定期的に顔を出さなくてはいけなくなった。

今日はツバキが出勤しており、普段は和服にエプロン姿の彼女がメイド服だったため、先の質問に至ったのだ。

「番組の収録？」

ロリっ娘メイドが恥じらう姿を脳内フォルダに保存しつつ、にやけそうになるのを必死で抑えながら、俺は極めて自然に、疑問に感じるべき部分を繰り返した。

「実は〈管理人〉が『ユーチューバーになって一攫千金だ！』と言い出しまして……」

ユーチューバー。

所謂、ネットに動画を投稿し、広告収入を得ている者達の総称だ。なんでも、今やちびっ子の憧れの職業らしい。職業なのかは甚だ疑問だが、特に他意はない。

「……いよいよ大丈夫か、その〈管理人〉」

常連しか来ないようなこじんまりした店に、自費出版の小説を置き、従業員の少女達にコスプレ紛いの衣装で接客をさせている時点でヤバいのに、ここに来て動画配信とは。

「本気で言っている訳ではないと思いますけど……恐らく」

苦笑を浮かべているが、ツバキも冗談だと確信は持てないようだ。

「どんな番組なんだ？」

「トークがメインですね。一応、ラジオという体なので」

「動画なのに？」

「――映像はあくまでオマケです。音声だけのコンテンツも認められていますし、ユーチューブをラジオ番組の配信に利用するのは珍しい事ではありません」

何時から居たのか、俺の疑問に答えたのは紅桜だ。ツバキより幼い――九歳くらいか――容姿の、紅い髪と目元を覆うバイザーが強烈に印象として残る少女である。ちなみに、俺を店長にしたのも彼女だ。

「ツバキ、そろそろ収録の準備をお願いします」

「あ、そうですね」

どうやらツバキを呼びに現れたらしい。二人の様子からして、まだ時間の余裕はあるようだが。

「すみません、お兄さん。私はこれで失礼しますね」

「んー」

俺の気のない返事に微笑で応え、メイドらしく優雅な所作でスタッフルームを出ていくツバキ。黒いドレスに、ふわりと靡く白いエプロンが映える。ロングスカートにシンプルなデザインのクラシックなメイド服は、彼女の清楚なイメージにこれ以上なく似合っていた。

「マスターの性癖にはドストライクだったようですね――いぇい」

「無表情のまま淡々と『いぇい』とか言うな」

口調だけは得意げにブイサインを出して見せる紅桜に突っ込む。ちなみに『マスター』

というのは俺の事だ。

「その言い方だと、あのメイド服は紅桜(べにお)が選んだのか？」

「肯定(アフマーティブ)です」

「〈管理人〉とかいう奴じゃないのか？」

「否定(ネガティブ)します。マイスターの趣味ではありますが、選んだのは私です」

心なしか、心外だと憤(いきどお)りのような意味合(ニュアンス)いを紅桜の言葉から感じた。

「あー……すまん」

なぜ謝られたのか判らない様子で首を傾(かし)げる紅桜。上手く説明出来(でき)る自信もなく、言及もされなかったため、俺は彼女の頭を撫(な)でて有耶無耶(うやむや)にした。

「ちなみに――ツバキが出る番組、何処(どこ)で観られるんだ？」

動画が公開されるチャンネル名と時間を知らされる際、バイザーの奥の紅桜の表情を、俺はまともに見る事が出来なかった。

Mission complete

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『そーりょくせんっ！』十五戦目をお届け致します。

……ほぼ二年ぶりの更新です。

四月でサイトが七周年となり、それ用にイラストを一年ぶりに描き、せっかくだからと筆を執（と）りました。イラストありきのショートノベルとして始めたシリーズなのですが、そもそも去年はイラストを一枚しか描かなかったので（しかもリメイク）。

今回はアサト視点のツバキを書いてみましたが、如何（いかが）でしたでしょうか？　『ゾイやみ』やブログとは違う、平穏で普通な世界の看板娘達をお楽しみいただけていれば幸いです。

メイド服のツバぴょん、可愛い……（自画自賛＆親バカですよ、ええ）。

よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。おかげさまで七年、続けられました。少しでも良いなと感じたらアンケートにご協力ください。コメントなしでも構いません。リアクションがないと、自己満足だけで創作は続けられなかったりします――マジで。

あと、ユーチューブは本当にやってるので、よろしければ。

２０２１／４／14　流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりょくせんっ！』ページに戻る